

元禄文学再考

——「かね」ではかる「ころ」と「いのち」——

本学教授 沙加戸 弘

元禄の文化は、日本文化史上初めて実現をいたしました「民の文化」でありました。元禄文学もまた日本文学史上初めて実現をした「庶民の文学」であります。したがってそれまでの文学とは、全く異質な側面を持っております。それまでの和歌・連歌・俳諧という歌の流れが爆発的に展開した時代ではないかと私は考えております。この元禄文化という国文学史における爆発的な転換期の文学を読み解いていく鍵は、おそらく「ドラマ」と「かね」でありましょう。本日は「ドラマ」ということを念頭に置きながら、「かね」或いは「数字」というものに着目をして、この転換期の文学、元禄の文学を読み解いてみたいと思います。

さて、元禄文化が日本初の「民の文化」であるという所以は、日本史上初めて庶民が、このいま「庶民」と申しましたのは主として製造業あるいは流通業に携わる人々であります。近世の位置づけでは、工・商と呼ばれた人々であ

ります。その近世の庶民が歴史上初めて可処分所得を手にした、自由に使える「かね」を手にした、それまでは食うに精一杯、たまたま「かね」が入ってきてても、それは全部行き先が決まっている、こういう状態であったところから初めて可処分所得を手にしたということであります。現代の日本でいえば、例えば音楽・漫画・服飾、大きく申せば「高校生の文化」になっております。それは高校生のところに最も自由になる「かね」があり、かつそれを思い切つて使う若さがあるということであります。「かね」を使うということは、使った対象を育てるということになります。近世の庶民は歌舞伎を見る、人形浄瑠璃を見る、小説を読む、あるいは俳諧に親しむ、こういうことによつてその対象の文化を育てたということになります。これが元禄の文化が日本初の「民の文化」であるという所以であります。

この日本初の「民の文化」は、故なく生まれたわけではございません。元禄文化を生んだのは、わずか一年という短い間隔で起こった二度の江戸の大火でございました。ご承知の通り慶長八年二月の十二日、徳川家康が朝廷から征夷大將軍の宣下を受け、西暦に直しますと一六〇三年の三月の二十四日でございますが、江戸に幕府を開きます。ちなみに江戸の名は、「江」すなわち隅田川の「戸（口）」、隅田川の出口に開かれた町という意味であります。それ以前から江戸の町は作られていたわけではありますが、江戸開幕以来各地の大名の屋敷ができ、さらに大名出入りの商人の江戸店ができ、職人が集まり、数十年のうちに世界有数の都市になりました。ところが明暦三年一月の十八日、本郷丸山の本妙寺というお寺から火が出ました。一説によれば、施餓鬼の火であった、施餓鬼と申しますのは、お正月のどんど焼き、近江では左義長（サギツチョ）、火祭りと申しますが、その施餓鬼が行われ、どういうわけかその施餓鬼の火に振袖が一枚投げ込まれた。明暦三年の一月の十八日は太陽暦に直しますと三月二日でございますが、江戸は空っ風でございます。この振袖に火がついたまま空へ舞い上がって火元になったと伝えられます。おさまってはまた燃え、おさまってはまた燃え、結局二日間燃え続けて江戸が三分の二焼けたと伝えられます。一年後、明暦四年一月

の十日、また火が出まして残ったところが焼けました。わずか一年という短い間隔で起こった二度の大火事、この二度の大火事で世界有数の都市、人口数十万といわれた世界有数の都市は灰燼に帰したわけであります。

再建ということになりました、ここに膨大な商品需要が起きました。材木を始めとして、衣食住、職人、技術、恐ろしいほどの商品需要が起こったのであります。ではこの商品需要に比べられるだけの生産力があったか。ございました。この国は室町の後半から戦国にかけて、ずうっと戦乱続きでございました。その戦乱が江戸開幕によってピタリと止んだ。働き盛りの人々が生産現場に戻りました。戦によって田畑が荒らされることなくりました。村々の自衛のための人手もいなくなりました。生産現場が復興していたので、飛躍的に生産量が増大しておりました。ではその物資が江戸へ運べたのか。運べたのです。数十年間の参勤交代によって街道と宿駅が整備されていたのです。ならばその物資に見合うだけの資金量があったか。あったのです、これが。佐渡の金山。佐渡の金山は古く、すでに『今昔物語集』に見えておりますが、一五四二年から銀山が開発されました。さらに豊臣秀吉の時代、「灰吹き精錬」という極めて進んだ技術が導入され、さらに江戸開幕直前、慶長五年から八年にかけて、斬新な経営革新がなされました。これらの事情によって佐渡の金山は飛躍的にその生産量が増大したのであります。佐渡へ行かれるとわかると思いますが、実は金鉱脈が露出していたのです。露天掘りができた。山がガボツとへこんでおります。天辺から掘れた。極めて多くの金を佐渡の金山はこの時期産出したのであります。

これらの事情によってこの国は、一六六〇年から一六九〇年までのほぼ三十年間、国始まって以来の高度経済成長を経験したのであります。物資は江戸へ、資金は地方へと流れ、一挙に貨幣経済となりました。ここに流通業が全国規模で成立をいたしました。この流通業が成立したという事柄は、世間の常識で申しますと「かね」が一定の価値を持ったということを意味します。流通が保証されなければ、これはもう砂漠で遭難したのと同じでありますから、い

くら子どもの頭ほどの金塊があっても何の役にも立たないのです。それよりは一個の握り飯の方が大切なのです。が、流通が保証されますと、極端な話、いつでも何でもある、こういうことになります。

極めて卑近な例で申し訳もないのですが、私が田舎の大学で学生時代を送りました昭和四十年代初頭、例えば友達と食事会をしようと思えば、昼の間にすべてのものを買い整えておかねばなりません。夜になれば店は閉まって、「かね」があってもどうしようもないという状態でありました。今は「かね」さえあれば、かなりな地方でも二十四時間、極端な話をすれば、何でも買うことができます。「かね」さえあれば何でもできる、いつでも何でもできる、これが流通によって保障される事柄であります。こうなったとき「かね」は、人生の目的とは申しませんが、少なくとも人間の行動の目的の一つとなり得ます。これが「かね」の自立であります。高度経済成長がもたらしたものの、「かね」の自立、「かね」がないのは首がないのと同じだという感覚、すでにご承知の通りこの国にはもう一度高度経済成長がございました。昭和三十五（一九六〇）年、六十年安保によって七月の十五日、岸内閣が総辞職いたしました。七月の十八日に開かれた臨時国会において池田勇人が首班に指名され、翌七月の十九日に第一次池田内閣が発足いたしました。国会解散総選挙と続きまして、十二月の九日第二次池田内閣が発足いたしました。暮も押し詰まりました十二月の二十七日、「所得倍増計画」が閣議決定されました。年明けて通常国会の冒頭、池田首相が所信表明演説において「所得倍増計画」を発表、その年、昭和三十六年四月の一日に成立をいたしました昭和三十六年度予算は、「所得倍増計画」初年度ということもあって、前年度比二十五パーセント増という積極予算でありました。そのあと、新幹線の開通、東京オリムピック、名神高速道路の開通、大阪万博、そして石油ショックによる狂乱物価からバブルの崩壊まで、やはり三十年間の高度経済成長でありました。この三十年間の高度経済成長の前と後、以前と以後、恐ろしいほどの我々の生活の変化はご記憶の方々も多いだろうと思います。座敷はあまり変わりませんけれど

も、変りましたのはお手洗いと台所と風呂です。後は車、空調、恐ろしいほどの変化であります。

今事新しくこのようなことを申しあげましたのは、元禄文化を生んだあの三十年の高度経済成長の前と後にもこれほどの変化があったと想像していただきたいからであります。今はこれほどの変化だけれども、江戸時代だったらいたしたことではないだろうと。そうではないのです。意識としてはこれほどの違いがあったと想像をしていたきたいのです。

今日ご参会の少しお年を召した方は、高度経済成長の前は室町時代と同じだったということをちゃんと覚えておられます。生活は室町時代と一緒だったでしょう。終わって見たらえらいことになっている、これが江戸時代に起こったのです。これほどの変化が一六六〇年から一六九〇年までの三十年間に起こったのです。この三十年の高度経済成長によってもたらされたものが元禄文化であります。

冒頭にも申しあげました通り、これほどの大きな社会変化が、社会様式の変化が、表現という人間の営為に影響を与えないはずはありません。文学は、ドラマは、「生きた」・「恋した」・「死んだ」、これではほぼ全部です。この人間の感動を表現するのに数字ほどすぐわないものはありません。しかしながら国文学史上、初めて数字で人心を表現したのがこの「元禄文学」であります。このとんでもない扉を開いた男がいます。浪花の生んだ世界的な作家、皆さんは何と発音なされますか、「イハラサイカク（井原西鶴）」、違います。間違い。「イハラサイカク」、大阪弁で「イハラサイカク」、これが正解です。私も長い間の学校教育で叩き込まれてきましたので、つい出てしまうのです。正しくは「イハラサイカク（大阪弁）」であります。井原西鶴は、俳諧師であります。我が国の歌の本流は、平安朝の短歌から室町時代の連歌を経て近世前期は俳諧に移っておりました。連歌・俳諧は我が国独特の文芸様式で、付け合い、今の言葉で申しますと会話、対話の形式を持つ文芸であります。語りかけ、これを発句とか前句とか申しますが、語りか

けに對して答へ・重ね・反発し、會話を重ねてそれを文芸とする、「會話型の付合文芸」であります。井原西鶴は、特に叙事詩的な傾向を強く持つ俳諧師でありました。西鶴は自らの能力が高かったからでありましょうか、相手の答えを待つのがもどかしかった。そこで「独吟」という形式を好みました。五・七・五、七・七、五・七・五と独りで展開させていく、「独吟」の俳諧に新しい境地を開きました。一昼夜の「独吟」、五・七・五、七・七、五・七・五、七・七と詠んでいくのですが、一昼夜二十四時間でどれだけ詠めるか。一昼夜「独吟」、延宝五年には千六百、延宝八年には四千句という記録を作りましたが、挑戦者も現れました。煩わしくなったのでありましょうか、貞享元年六月の五日、一昼夜「独吟」二万三千五百句という驚異的な記録を作って、自らこの「独吟」俳諧の流行に終止符打ちました。一昼夜二十四時間二万四千句でありますから、一時間に千句、三・六秒に一句、お手洗いや食事を入れての二十四時間ありますから、お手洗いと食事の時間以外はずうっと句を吐き続けた、物理的にはこれ以上無理だという数字であります。どのような方法がこれを可能にするでありませんか。二十四時間句を吐き続ける、抒情詩、「三井寺の 門たたかばや 今日月」「やがて死ぬ けしきも見えず 蟬の声」、到底無理です。抒情詩は到底無理です。なら方法は一つしかありません。場面の連想と、その実況中継です。場面を想定し、そこに現われてくる状況をアナウンサーのごとく五・七・五、七・七で実況中継していく。頭の中に思い浮かんだ情景を実況中継していく。これしか方法はありません。西鶴が句を読んだその速さがあまりに速かったので、書き留める時間がなかった。そこで一句を一本の線であらわしたと伝えられ、実際の詠句は残ってごさいません。だから根拠に欠けるといわれれば、その通りであります。この方法は井原西鶴の他の「独吟」俳諧で類推することができます。つまり井原西鶴の「独吟」俳諧は叙事詩となり、必然的に展開を持つ物語となり、ドラマとなった、俳諧が必然的に物語になっていったということになるわけであります。事実彼の最初の浮世草子、『好色一代男』はこの一昼夜「独吟」二万三千五百句よ

りも早く成立しております。

小説の世界へと活躍の場を広げた井原西鶴は、人間の色模様から、武士の生き方、そして説話へと関心を展開させ、商人・町人の世界にいたります。「かね」に翻弄される人心、「かね」に踊る人心を笑ってみせたのであります。その町人ものの傑作が元禄五年正月に刊行されました『世間胸算用』であります。この中で井原西鶴は、三十年間の高度経済成長を、お手元の資料を一枚めくっていただきまして、「資料一」をご覧ください。『世間胸算用』巻之五之一、「つまりての夜市」であります。この中に、

諸国ともに三十年このかた、世界のはんじやう目に見えてしれたり。

と、記しております。今申しあげましたように、『世間胸算用』は元禄五年正月の刊行でありますから、元禄四年には完成していたということになります。この年井原西鶴は五十歳、越し方を振り返って二十歳までとそれ以後の三十年は全く違うというふうにいっているのです。ここからも間違いなくこの三十年がとんでもない高度経済成長の時期であったということはお分かりいただけるだろうと思います。この『世間胸算用』の中で井原西鶴は、文学においてもっとも馴染みにくい「数字」を素材として用いました。日本で初めて「悲しみ」を金額にした男であります。そもそも日本の文学において、「数字」はほとんど現実味を持つておりませんでした。『御伽草子』の「一寸法師」、お椀の船に箸の權、お椀の大きさは今も昔も変わりません。手に合わせてあるからです。あのお椀の中に一寸、三センチの人を入れてみて下さい。残念ながらへりまで届きません。お椀の船に箸の權、三センチの人に割り箸を持たせてご覧下さい。つぶれます。針をもらって剣にしましたといっても、針なら三センチより長い。到底実質的な意味がある一寸ではない。となると、この「一寸法師」というのは「小さな男の子」という意味にならざるを得ません。また他の『御伽草子』を紐解いてみれば、富み栄えた長者が四方に四万の蔵を建てたとあります。四万蔵を建てたら、

一日に十戸前ずつ検分しても十年以上かかります。全く現実味のない「数字」であります。

時間もまた「数字」で示されることはほとんどありませんでした。文学においては、「資料二」、「源氏物語」の冒頭であります。これも関西弁で読んでください。京都で生まれた文学ですから、東京の言葉では読まないようにしてください。

いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

と、読んでいただく方が少なくともアナウンサーの言葉で読むよりは元に近い。「数字」は出てまいりません。あるいはまた資料にはのせてごさいませんが、『今昔物語集』は「今は昔……」と語り始められます。ことほど左様に日本の表現の歴史において、「数字」が意味通りに素材として使われることは少なかつたのであります。ところが元禄の世、人々の日常生活の中に「かね」というものが定着したということを受けて、井原西鶴は人々のあり様や感情を金額にして見せたのであります。この『世間胸算用』は、一卷に四話、五巻ごさいまして、合計二十の短編を収めております。このころの上方では、すべてツケで買い物をいたします。通帳に付けて、通いに付けて、すべて付けて買い物をいたします。それで年五回の支払日に清算をするという習わしでございました。他の支払日は頼めば何とか待つてくれたようではありますが、大晦日だけは相手も支払いをしなければならぬ身でありますので、借金取りとの攻防が非常に激しかったようであります。大晦日は一日千金、「時間」と「かね」とが一つになって人々を責める日でありました。五巻二十話、すべて大晦日の話であります。例を一つ挙げます。巻五の「平太郎殿」であります。近世、京都・大坂、あるいは近江では、毎年節分の夜に真宗の道場で「平太郎殿」という御法座がございました。近江には今もなお伝えているお道場がいくつかございますが、もう京都では聞いたことがございません。親鸞聖人の伝記であ

ります『御伝抄』の下巻の五段目、平太郎の熊野参詣を独立させた縁起を奉読する御法座であります。真宗の教えと神祇とがどのように関わるのか、多くの神社に対して門徒はどのように接したらよいのか、という主題のもとに一夜讃談をするという御法座であります。参詣も非常に多かつたようではありますが、ここに描かれておりますのは、井原西鶴が描いておりますのは、暦の關係で節分と大晦日が同じ日になった。大晦日だからか、非常に忙しいからか、真宗の道場へお参りする人は少ない。三人しかおらん。「毎年は何十人とお参りがあるのに、今日は三人や」と、そういう平太郎殿が描かれております。わずか三人しかお参りがなかった。その三人も信心によつて参つたのではないと、三人それぞれに懺悔物語をいたします。そのうちの一人、生まれは伊勢の国でありますが、行商の小間物屋の男が死んだあとへ入り婿をいたします。しかし、その商売をしくじつて、女房に追い出されます。入り婿ですから非常に立場が悪い。追い出されてしまいます。「明日は伊勢の国へ帰る算段をいたしました、今夜一晩明かすところがなくてここへ参りました」と、懺悔をいたします。働きが悪いために女房からいじめられます。ミチミチ、ミチミチいじめられます。その「資料」、ちよつとご覧下さい。

さりとては入婿口をしく(非常にいじめられますので、堪忍ならぬ所なれども(男としては堪忍できないところだけけれども)、是非なく日をかさね(しょうがなく日を送り)、『我がふるさとにすこし借置きたる銀子もあれば(ちよつと貸した金があるから、あれを取り立ててこよう)、これを取りあつめて、この節季仕舞』と、はるばるくだりける甲斐もなく、その者どもはみな所をされば(住所を変えてしまったので)、又手ぶりにて、やうやうけふの夕食前に、宿へ帰りしに(留守番をしておった女房)、何とか才覚いたしける(何とか算段してくれた)、餅もつき、薪も買ひ、神のをしきに山草の色めきければ、『世はなげくまじ、又引きあぐる神もありて、留守のうちに手回しよく内証仕舞置きける』とうれしく、『無事で帰りたる』といへば、女房もいつよりは機嫌よくして、先づ足の湯を取り

もあへず、鰯膾を片皿に（節分ですから）、赤鰯の焼物にて、（ちよつと余談ですけれども、文学表現の中に食物がこういうふうに出てくるのも西鶴が初めてです。このあとは檀一雄まで飛びます）、鰯膾を片皿に、赤鰯の焼物にて、心よく膳をすゑける程に、箸とつて喰ひかかる時、『伊勢の銀どもは取つて御座つたか』といふ。不仕合せいふを聞きもあへず、『そなたは手ぶりで、ようもようも戻られた事ぢや。この米は、一斗を二月の晦日切りに約束して、われらが身を手形に書入れて、九十五匁の算用にして借りましたよ。世間は四十目の米喰ふ時、九十五匁の米を喰ふ事、そなたの鈍なるゆゑにかかる仕合せ。持つて御座つたものはふんどし一筋、何も損のまゐらぬこと、夜に入れば闇うなります。足もとのあかいうちに、出て御座れ』と、喰ひかかつた膳をとつて、追出す時（こやうつて追い出されてしまいます）

ここで女房が語ります「借りた米」、一斗借りたのですから、銀九匁五分の算用、一石にいたしますと九十五匁、世間の相場は一石四十匁、つまりこの差、五十五匁がこの女房の怒りの大きさであります。西鶴は、ここでももの見事に腹立ちを金額に見せたわけであります。かつこの男は手ぶらで婿入りしたということを「持つて御座つたものはふんどし一筋」と女房にののしらせて、被つた被害の対極において女房の腹立ちを際立たせております。これ以前、元禄三年に成立をいたしました芭蕉一門の連句、『猿蓑』に入つてございます凡兆の

市中は物のにほひや夏の月

を発句とする三吟歌仙の中で、「資料四」をご覧ください。芭蕉は傍線を引きましたところ、芭蕉は、

此筋（このすぢ）は銀（かね）も見しらず不自由さよ

と詠じて、「かね」が便利なものであるという認識を素材として、都と片田舎の生活の違いを表現しております。この二年後が『世間胸算用』であります。

さて、十年ばかり時間を進めます。元禄十六年五月、大坂道頓堀竹本座で『曾根崎心中』が初演されました。人形浄瑠璃では初めての「世話物」、すなわち現代劇であります。作者近松門左衛門は、その自筆の辞世文に「代々甲冑の家に生まれながら武林を離れ」と記しておりまして、武家の出身で、やはり俳諧から「ドラマ」へと歩みを進めました。この『曾根崎心中』は文字通り心中の大流行を生み出した先端の文学であります。内容を簡単に紹介いたします。「資料五」に概略を載せておりますので、ご参照ください。

大坂内本町の醤油屋、平野屋の手代徳兵衛は、堂島新地の天満屋抱えの遊女おはつと深く契りを交わしております。ところが平野屋の主人、実は徳兵衛にとりましては叔父なのでありますが、平野屋の主人は徳兵衛と自分の姪とを娶わせて、跡を継がせようと考え、徳兵衛の継母に婚約の金、銀二貫目を渡します。おはつという想い人がある上に、主筋の女性と夫婦になるのはまっぴらと、この話を断った徳兵衛に、主人は金を返せと迫ります。大層な難儀をして継母から取り返した二貫目の金を迂闊にも徳兵衛は、友人油屋の九平次に騙し取られてしまいます。策尽き面目立たず、徳兵衛は曾根崎天神の森でおはつとともに死に、「未来成仏疑ひなき、恋の手本となりにけり」と一曲は締めくくられます。

この『曾根崎心中』について、言及しなければならないことは多々ありますが、本日は「ドラマ」と「かね」、二つの事柄を申しあげておこうと思います。

文学は、言葉による感動の表現であります。人生の再現、或いは人生の一部の再現であります。そこには「主題」があり、「素材」があり、何よりも表現されなければならない「必然性」があります。焦点の定まらない話をいたしますと、大阪文化圏では「落ちのない話をすな」といって怒られますが、これも語られなければならない「必然性」と深く関わる事柄であります。「主題」と「素材」のつながりや、「素材」そのものの選択、表現の方法にも深く強い

「必然性」が求められます。この『曾根崎心中』でいえば、主人公の設定、なぜ醤油屋でないといけないかという問題です。当然モデルとなった実際の事件の男が醤油屋であったという説もあるのですが、最終的に醤油屋という設定にしたのは、近松門左衛門であります。

松尾芭蕉が折に触れて語りました「俳諧論」を、高弟向井去来が書き留めた『去来抄』という書物がございます。この『去来抄』の第三条に、

行く春を近江の人とお（を）しみけり

という芭蕉の名句をめぐる議論が出てまいります。「資料六」をご覧ください。

行く春を近江の人とお（を）しみけり はせを

先師曰く「尚白が難に、近江は丹波にも、行く春は行く歳にも、ふるべし、といへり。汝いかゞ聞き侍るや」。

去来曰く「尚白が難あたらず。湖水朦朧として春をお（を）しむに便り有るべし。殊に今日の上に侍る」と申す。

先師曰く「しかり。古人も此国に春を愛する事、お（を）さお（を）さ都におとらざる物を」。去来曰く「此一言心に徹す。行く歳近江にゐ玉（給）はゞ、いかでか此感ましまさん。行く春丹波にゐまさば、本より此情うかぶまじ。風光の人を感動せしむる事、真成る哉」と申す。先師曰く「汝は去来、共に風雅をかたるべきもの也」と、

殊更に悦び玉（給）ひけり。

尚白という弟子は太田におりました医者でありますが、その尚白が芭蕉の発句「行く春を近江の人とお（を）しみけり」、最終的には「ける」と連体形になります。この句を「行く春は行く歳にも、ふる。近江は丹波にも、ふる」と批判したのです。「ふる」と申しますのは、俳諧の用語で他の用語に置き換えることができる。すなわち「必然性」を持った作品として完成していないということを表わす言葉であります。具体的には、「行く歳を近江の

人とお(を)しみけり」これでも良いのではないか、「行く春を丹波の人とお(を)しみけり」、これでも良いのではないか、どちらでも良いのではないかと。「春で近江でないといけない」「必然性」がどこにあるか」という批判であります。「そなたはどう思うか」と芭蕉は去来に尋ねます。「尚白の批判は的外れであります。春をおしむのは近江でないといけません」と去来は答えます。近江に冬がないわけではありませんが、湖水が最も湖水らしく輝くのは春であります。開発が進みまして、昔日の面影はございませんが、それでもなお琵琶湖の春は夢であります。この感覚が積み重なり、完全に定着いたしたものを「歌枕」と申します。吉野は「桜」、富士は「白雪」、「去来、そなたは風雅を語る友である」、芭蕉の最高の褒め言葉であります。ではこの『曾根崎心中』、なぜ醤油屋でないといけないか。

醤油は早く奈良朝に醬(醢・ひしお)の記録がございますが、一般には鎌倉前期、建長八年に禅僧覚心が宋から径山寺(金山寺)味噌の製法を紀州湯浅に伝え、たまり醤油が考案されたのが液体醤油の濫觴であるとされます。永禄元年には、野田で初めて濃口醤油が作られ、天正十五年には播州龍野で薄口醤油が作られますが、大量生産の体制が整い、江戸・大坂で一般化するのは享保・元文のころ、すなわち近世後期の初めであつたと樋口清之氏の『日本食物史』にあります。つまり元禄十六年、醤油屋は新興先端の職業であつたということになります。『曾根崎心中』・「生玉社前の段」、おはつに呼び止められた徳兵衛が連れていた丁稚を先に帰す場面で、丁稚に言い聞かせます。「資料七」をご覧ください。

コレ長藏おれは跡から往(い)の程に。そちは寺町の久本寺様長久寺様。上町から屋敷方廻つてさうして内へ往(い)にや。徳兵衛もはや戻るといや。

とございまして、かなり裕福な階層を得意先として推定されます。初めての「世話浄瑠璃」という先端の意識が読み取れます。

今一点触れておきたい事柄があります。それは「死の理由」ということであります。古来、物語の中に軍記の中に、多くの「死」が描かれてまいりました。諫めや謝罪のための「自害」、往生を願つての「入水」、「入定」、「老衰」、「病氣」、「事故」、「戦死」、「処刑」、義による「自害」、「呪い」による「死」、実に様々な「死」が描かれてまいりました。が、それらは平安・鎌倉の昔にはほ出尽くして、以後ほとんど変わっておりません。ところがこの元禄十六年五月、『曽根崎心中』の上演にいたつて、「恋の成就」としての「死」というものと、「かね」がないために死ぬというこの理由が、新しい理由が文学表現の中に加わったのであります。「恋の成就」としての「死」は、発想としてはわずかですが、前例がございます。「資料八」をご覧ください。『新古今和歌集』巻の第十三、「戀之部之三」、冒頭であります。

忘れじの行末まではかたければ けふを限りの命ともがな 儀同三司母

決して忘れない、いついつまでもとあなたは仰せられますが、頼みとならぬ人の世でございますので、欠けることなく恋の成就した今日、これを今生の思い出として死ぬことができましたなら、これ以上のことはございませんという内容であります。同時代、和泉式部にも同様の発想の歌がございますが、この儀同三司母の歌は当時から非常に評価が高かった。加えて後に藤原定家の『小倉山荘色紙和歌』、いわゆる『百人一首』に入集いたしましたことによつて広く人口に膾炙しております。こういう発想の前例がございますので、今しばらくおき、「かね」がないために死ぬ、逆にいえば銀二貫目という「かね」があれば死ななくてすんだと、このような「死」が初めて描かれたということに着目したいと思います。

元禄六年に死んだ、先ほど申しました天才井原西鶴も、「かね」がないために死ぬということは書いておりません。十年間の感覚の変化が明らかに読み取れます。新しく「死の理由」が加わった、それが「かね」である、文学の素材

として、ドラマの素材として、「かね」というものが大きな位置を占めるようになった、これが元禄の文学とそれ以前の文学との一番大きな違いであろうと考えるものであります。

それには女主人公が「遊女」であるという事柄も併せ考えておく必要があります。「遊女」という存在は、二十四時間「かね」に縛られた存在であり、顔を見ているだけで「かね」がいるという女性であります。逆に「かね」さえ払えば、一定時間我が物とできるといふ存在であります。人と心と物が「かね」といふものを媒介としてイコールで結ばれる、これが元禄という時代の大きな特徴であります。いずれにせよ「死の理由」が一つ増えた、これ元禄が文学表現の転換期であるとする所以であります。

さて、正徳元年三月、近松門左衛門十四番目の「世話浄瑠璃」として、『冥途の飛脚』が竹本座で上演されます。内容をごく簡略に紹介いたします。「資料九」をご覧ください。

大坂淡路町の飛脚問屋亀屋の跡取り忠兵衛は、二十四歳。四年前に大和新口村から養子に来て、大坂の水にも慣れ、商売もそつなくこなしておりますが、新町榎屋抱えの梅川という遊女と深い契りを交わします。ところが梅川に「身請け」の話が起きます。「身請け」と申しますのは、当該遊女が持つておりますすべての借金を肩代わりいたしますして、その遊女の身柄を引き取るということなのですが、身請けされますと梅川は忠兵衛に会うことができない、好きでもない男に添わねばならない、忠兵衛はあれほど馴染みを重ねていたのに結局身請けできなかつたということで面目が丸潰れになります。そこで忠兵衛は、友人丹波屋八右衛門宛の江戸為替五十両を身請けの手付金に使ってしまいます。いわば横領であります。このことを心配した八右衛門は、一番心配いたしましたのは手付を打つたら残金を払わないといけないということです。手付けを打つことは、買う約束をしたということでありますから、残金を払わなければなりません。このことを心配した丹波屋八右衛門は、廓でこのことを話し、忠兵衛に梅川

を諦めさせよういたします。が、この話を立ち聞きした忠兵衛は、悪口をいわれていると誤解し、ちようどそのとき懷に持っておりました武家屋敷へ届けなければならぬ公金三百両の封印を切つて、その場で梅川を身請けし、手に手を取つて落ち延び、故郷新口村で実の父孫右衛門によそながら別れを告げ、捕縛されるというものであります。

江戸・大坂間で現金輸送をする飛脚屋と遊女というまことに元禄らしい設定と、封印切では舞台に小判が乱れ飛ぶという演出によつて、これは当時の人々にも斬新だったのでありましよう。この作は大当たりをいたしました。近松作品の中でも、再演回数一、二を争う名作、また現在もなお、舞台生命を保つ人気作であります。この『冥途の飛脚』で注目すべきは、忠兵衛の故郷が「大和新口村」と設定されたことであります。この作品にもモデルとなつた実際の事件があり、その男の出身が「新口村」であつたという説もあるのですが、「これは良い」、「これでいこう」と定めたのは近松であります。「新口」は、近鉄の駅にございます。急行は止まりませんが、現在もあります。次の駅が八木西口。降りていただきますと、「今井」という町がございます。「今井」は中世以来、寺内町として発展し、近世に入りますと交通の要衝として、また物資の集散地として、ますます富み栄え、「大和の富の半分は今井にある」といわれたほどの繁栄を誇つた街であります。その隣りが「大和新口村」。五千両、七千両、東海道を我が物顔に輸送いたしますが、それは人の金。預かり金であるという飛脚屋忠兵衛、その故郷が「大和新口村」、金がうず高く積まれている「今井」の隣り、見ている金は人の金という忠兵衛の状況がまことに見事に形象化されているのを読み取ることができます。

以上、申し述べてまいりましたように、元禄文学は我が国初の「民の文学」である故に、それまでの文学とは全く異質な側面を持っております。その元禄文学を読み解く鍵は、一つは「ドラマ」でありました。西鶴は「独吟」俳諧を展開させ、走馬灯の如き技法から「ドラマ」に進みました。そして「数字」という感動を表現するには最も縁遠い、

それまでの文学のありようからは考えられないものを使って人の心を描いてみせました。「悲しみ」を金額にしてみせ、「悔しさ」を時間にし、「怒り」を数字にしてみせたのであります。

本日は触れることができませんでしたが、松尾芭蕉もまた俳諧から出発して「ドラマ」を描いてみせた作家であります。先ほども申しあげましたように、俳諧は本来、挨拶・対話、会話の形式による「付合文芸」であります。その対話・会話を持って本とする「付合文芸」である俳諧に、「独詠句」を持ち込んだ、いや「独詠句」であると読める可能性を開いた、これこそ芭蕉が異端の俳人であることの所以であります。しかして元禄七年十月の十二日、彼が大坂の南御堂の前で死んだとき、彼の笈に大切にいられていたものは俳諧選集の『猿蓑』でもなく、『灰俵』でもなく、『奥の細道』でありました。『土佐日記』のような旅の「ドラマ」を、歌でなく、発句で成し遂げる、これが彼のものとも目指したものであります。そして近松は、作品の隅々まで「必然性」を持った真の意味の「ドラマ」を完成させました。

今一つ、「元禄文学」を読み解く鍵は、「かね」でありました。現代でこそ「悔しさ」を値段にする、「悔しさ」に値段を付けて慰謝料を要求する、人の「いのち」の補償金に差がある、自分を想ってくれる相手の「こころ」を贈り物の金額で計る、おじいちゃんが「大切にせよ」と言い残した壺をテレビ局に持っていつて値段を付ける、ごくごく普通のことではありますが、「悲しさ」や「悔しさ」、「大切さ」や「恋心」、果ては「いのち」を「かね」ではかるというこの発想、この表現は実に「元禄文学」に端を発するものであります。その意味では、元禄はまさに現代の始まりであります。ひよっとすると「元禄文学」を読み解く鍵は、本当は「こころ」と「いのち」の感受性のデジタル化であつたかもしれません。

ご静聴、ありがとうございました。

〔編集委員会付記〕

二〇〇七年度大谷学会春季公開講演会では、本学教授沙加戸弘先生の講演の後、東京大学経済学部教授・岩井克人先生の「貨幣・法・言語と『人間』」という講演を拝聴した。しかし、残念なことに、先生の御都合でその御講演をそのままここに掲載することは叶わなかった。

この講演での岩井先生は、最初に、経済学の立場というよりも人文社会科学の立場から、現在、人間の科学つまり「本来の意味での人間学」がいかに成立するのかを、「宇宙人から見た貨幣・法・言語」というシンプルかつ本質的な観点から論じられた。物理的感覚的存在ではないが、人間にとっては欠くことのできない貨幣・法・言語によって指示されるリアルな実在を考察することこそ人間学であると、クリアにかつ緻密に示しておられた。つまり、人間においては物理的実体のないものが人間を人間たらしめているのである。これを受けて、岩井先生の専門である「貨幣論」においては「貨幣が貨幣によって貨幣を基礎づける」というある種の循環論を形成するということを述べられた。

この「循環論」は法や言語あるいは宗教においても重要な指摘である（たとえば「空」の問題への）。この「循環論」を中心とした問題に関しては、『資本主義から市民社会へ』（現代書館）を参照してほしいとのことであった。しかし、「貨幣論」になじみのない方には、文学部的人間への「貨幣論」の見事な導入の書である『ヴェニスの人』の資本論（ちくま学芸文庫）がまず読まれるべき書として推薦されるべきであろう。